ジージー音の行方

奥野忠昭

夫はまだ降りてこない。今日もまた起こしに行かなければならないの、と華美は思う。以前、華美が不満を言ったら、目覚ましをかけて独りで起きると約束し、さっそく目覚まし時計を買ってきたが、それで起きたのは、たったの二日間。

今日も、先ほどからジージーと目覚まし時計が鳴っている。最近、耳に意識を持っていくといつもジージーと耳鳴りがする。きっと、あの時計のせいよ、それとも、もう老化の始まり？　更年期障害？　嫌だよ、そんなの。まだそれほどの歳ではないのに。

だったら、どうして？　何が原因？　なんとかならないの、この耳鳴り。

夫は相変わらずベッドの中だ。五十歳に手の届いてしまった夫は、仕事の疲れがひどくなったのかもしれない。でも、これでは会社に遅れてしまう。時計を見ると七時十分。彼が家を出なければならないのは七時四十分。

しかたがない。華美は二階への階段を歯ぎしりのような音を立てて登る。

「夫君（おっとぎみ）、早く起きなさいよ。会社に遅れるわよ」

彼が被っている布団をたくし上げようと思うが、布団の端をしっかりと握り、離そうとしない。

「もう七時二十分。会社に遅れるよ。朝ごはんを食べないの」

耳元で何度も繰り返す。夫はようやく反応する。

「何だって、七時二十分。どうしてもう少し早く起こしてくれないんだよ。朝ごはんを食べないなんて、それでは電車の中で倒れてしまう」

夫は飛び起きる。彼は目覚まし時計を見ない。ベッドの布団は乱雑なままだ。華美はちらっと彼の机を見る。昨夜、遅くまでやっていたのだろう、ゲーム機が放りっぱなしだ。

「夜はゲームをしないで。したら後片付けをしておいてね」と何度も言った。それに、華美が片付けをすると、放っておいてくれ。俺が帰ってきたら片付けるから、と言う。でも、華美はずっとこの家にいる。二階の部屋は共有だ。二階に上がれば否応なしにそれらが目に入る。苛つくのよ。華美はすべてのことがきちっとしていなければ気がすまない。落ち着かない。イライラする。いつかそのことを誰かに話すと、「あなたはきっと不完全恐怖症よ、メンタルクリニックへ行った方がいいわ」と言われた。

夫はパジャマのまま、階段を下りていく。華美も下りていく。きっと顔も洗わないで食事を済まそうとするのだろう。嫌だ、注意をしなけりゃ。「顔ぐらいは洗いなさいよ」。きっと「後で洗う、髭と整髪は念入りにするのだから。そのときにすればいい」と言うに決まっている。そう思うと耳に意識がいき、ジージーという耳鳴りがする。

朝早く起きて食事を用意したのだから、それに感謝の気持を込めて顔ぐらいは洗ってほしい。飢えた獣のように食べてほしくない。ただ、口に流し込むだけなんて嫌。「ガツガツ食べるのは止めて。もっとゆっくり食べてよ。せっかく作ったんだから」と何度もそう

言った。「うん」と、彼はきまり悪そうに私を見る。でも「味わっている暇などあるものか」、それが夫の本音。だったらもっと早くに起きてよ。

でも、華美は最近、何も言わなくなった。それは決して寛容になったわけではない。諦めたのだ。だが、それを見るごとにムカつく、イラッとする。

「文句を言わないの、それでいいの？」と自分に問う、怒ると夫は朝から気分が悪くなるだろう。会社でとんでもないミスを犯すかもしれない。じっと我慢する。それが、最近の朝の儀式だ。また耳鳴りが聞こえる。ジージーと蝉の声、それとも虫の声か？

すでにコーヒーが冷めている。夫はそれを温めてくれとは言わない。おいしく飲もうなんて思わないのかなあ。「温めようか」と言えばきっと「いいや、これでいい」と言うに決まっている。でも、冷めたコーヒーを飲んでいる男なんか見たくない。華美は夫の前からコーヒーカップを持ってレンジに行き温める。そうして再びそれを夫の前に置く。「ありがとう。すまないね」夫はこちらを向いてきまり悪そうに瞬きを繰りかえす。

小学四年生のミハルが洗面所にいる。ここから半分見えている。丁寧に洗った髪の毛をドライヤーで乾かしている。早くしないと、夫がそこを占領するよ。

「ねえ、昨晩寝るのが遅かったの。ゲームをしてたんでしょう」

「ああ」と夫が答える。

「夜、ゲームをやるの、止めたらと何度も言ったのに。止められないの」

「いいや、ちょっとしただけだ」

夫はすでに食事を済ませ、立ちながらコーヒーを啜っている。

「この頃はエンジニアにも身だしなみはきちんとせよとやかましいのだ。身だしなみの悪いやつは正確さに欠け、どこかでミスをやらかすに違いないと思われているからね」

身だしなみをきちんとすればミスがなくなるの。家で、夜遅くまでゲームをやり、後片付けもしないで放っておいてもミスが多くならないの。

夫に比べ、娘のミハルはいい子だ。華美の言いつけはすぐに守る。自分に似たのだと華美は満足する。夫の母親が悪いのだ、小さいときに何も躾けなかったからだ。それに比べて華美の母親は華美がだらしないことをすると、必ず血相を変えて怒った。「もっときちっとしないと世の中を渡っていけないのよ。他人さまに迷惑をかけるのよ。私たちの職場では絶対にミスは許されないの。患者さまの命に関わるのよ」と口癖のように言った。華美の母は大きな病院の看護師だった。

どうして自分がこの歳になって未だに夫を躾けなければならないの。結婚してからすぐに彼に言った。「後片付けをきちんとしてね。何かを使ったら必ずもとのところに戻しておいてね。トイレの扉は開けたら必ず閉めてね。部屋にいないときは必ずテレビも電気も消してね」。「君の言うように後片付けはきちっとするよ。電気も必ず消す」と夫は約束した。でも、未だにそれは直らない。会社ではどうなっているのだろう。そうだわ。彼は、会社ではきちっとしていてミスをしない。それに仕事が終われば、用具類は念入りに片付けているのだ。

彼の家は農家で、用具類はきちっとしまわないと、母親に叱られたと言っていた。彼の父親は彼が五歳のとき、胃がんで亡くなり、近所に住んでいた母親の兄に手伝ってもらって、農業をつづけていたという。だが、父がいるときは、乳牛も数頭飼っていて、乳を搾り、町へ売り出していて収入もかなりあったそうだが、母親は農業だけでも精一杯で、牛

はみんな手放し、そのため、現金収入は乏しくなり、かなりの貧困家庭だったそうだ。中学生ぐらいから農業を手伝ったのだが、農業ではきちっとしなければいい食物が育たない。彼はそのことを仕込まれたのに違いない。それで、仕事場では決してミスをしない。そのため、全身を仕事に集中させているのだろう。その反動で家ではだらしなくなるのかも。でも、それではこちらはたまらない。この矛盾をどうする。

夫は朝起きたらすぐに顔を洗うという習慣がついていない。夫の言い分はこうだ。「親父のいたときは近くの湧き水から、水を引いてきてそれを使っていたそうだが、その水源も、涸れてしまい、しかも、母親が他の水源を見つけられず、俺の家には昭和の終わり頃になっても水がなかった。何しろ家は山の頂上近くにあり、井戸を掘っても水が出ず、もちろん水道もそこまで上がらず、かなり下の親戚の水道から水をもらい、バケツに水を入れて運んだ。水運びは俺の仕事だったので、水は食べ物以上に貴重なものに思えた。何しろ、家の桶に水を入れるときは腕がしびれ、心臓も飛び出るほど激しく打った。それを何度もやらなければならない。それを思うともったいなくて顔など洗えるものか。雨が降って水を溜めたときだけ、顔を洗えただけだ、と言っている。今時、そんなところがあるものかと思う人がいるかも知れないが、最近テレビで、山奥の一軒家で、しかも現在もそこに暮らしている人たちをルポした作品が放映されている。夫はそれを見ながら、四、五十年も前には、あれほど山奥でなくても、山の上の家には水道が通じず、あれに似た暮らしをしていたのだと言っている。

確かに彼は水に対してはきちっとしている。水道の栓を閉め忘れたりすることはない。皿洗いなどは手伝ってくれるが、水をほとんど使わない。でもきれいに洗える。未だに水を大切にする習慣がついている。水をたくさん使っている自分やミハルを見ると顔を顰める。でも何も言わない。見ない振りをする。

でも、いくら水が大切だといったって顔を洗うぐらいはできただろう。ただ、めんどうだっただけに違いない。それに、夫の母は「朝、顔を洗わないと朝ご飯は食べさせませんよ」と言って、なぜ躾けてくれなかったのか。その他にも夫は基本的な習慣がついていない。そんなところを見るとけっこう腹が立つ。苛つく。

夫の祖母、つまり夫の母親の母がまだ二歳のときに死んだそうだ。それで母親のいない夫の母は誰からも躾けられなかった。そのため彼女は夫にも躾をしなかった。躾をしない連鎖がつづく。

嫌だよ、そんなの。 自分は娘のミハルにはちゃんと躾けた。今も躾けている。言葉遣いだって注意している。変な言葉遣いはさせない。言い間違えば即座に直す。だって、大人になっても変な言葉遣いをしていては笑われるし、子供が産まれたとき、正しい日本語の教育もできない。もし、アナウンサーにでもなりたいと思ったら、ちゃんと話せなかったらかわいそう。

夫はようやく朝食を食べ終わった。彼が立ち上がり、洗面所へ行き、髭を剃り、整髪を始めた。華美は夫の食べた痕を見る。ランチョンマットの上には、ドレッシングの油滴がたくさん付いている。野菜を口に運ぶときに垂れたのだ。それにパンくずが小さな虫の卵の群れとなってくっついている。これではまるで小さな子供が食べた痕と同じ。「ものをこぼさないで食べて」華美は何度も注意した。ヒステリックに叫びたくなったときもある。夫に注意すると、きまってそのたびに黒目を真ん中に集めてこちらを見る。

「俺の口は小さいからな。一度にたくさんのものをほおばれないんだ」と言う。確かに夫の口は小さい。大口の人の半分ぐらいだ。だからといってこぼすのは許せない。マットの上だけならまだ許せる。それが床にも落ちている。

華美は腰をかがめて「嫌だ。もう」と言いながら、こぼれているパンくずや野菜の切れ端を拾う。どうしてこぼさないで食べられないのかな。でも、もう注意はしない。

華美は自分にはこれと言った才能はないし、それに、小さいときから家事の手伝いをしていて、料理を作るのが好きだった。何よりも人と接するのが苦手だったし、自分の母親は看護師をしていて、学校から帰ってきても家にはいず、さみしい思いをしてきた。夜勤もあって、夜も帰って来ないときもあった。そんなとき、夜も独りで過ごした。もし大人になって子供ができたら決してそんなさみしい思いをさせたくないと思い、専業主婦になろうと決めていた。公立の大学に行くことができたが、学部は家政学部を希望し、栄養学を専攻した。友人たちは、卒業後、中、高の家庭科の教師になったり、給食会社の栄養士になったり、大病院の入院患者のための栄養士になったりしたが、華美は保育園の栄養士になり、自分に適した男がいないか探すことにした。条件は、自分を専業主婦にしてくれること、収入は普通のサラリーマンよりはるかに高給取りであること。真面目で浮気などしそうにない人、というのだった。なかなか見つからなかったが、母もそれには大賛成で母は同僚に彼女の息子さんを紹介してもらった。彼は有名大学の工学部の大学院出身で外国にも留学経験がある、大会社の研究室勤務のエリート社員ということだった。研究に没頭していて、華美とは歳がかなり離れていたが、一年以上の交際を経て結婚した。

華美の父は、彼女が五歳のとき、女を作って出ていった。母も働いていて、父より給料もよく、母が忙しいときや夜勤のときは父が華美の面倒を見ていたらしいが、父も管理職になって忙しくなり、華美を看るのがおっくうになり、ときには華美を虐待していたということだ。でも華美は憶えていない。

夫も、父がいず、学校から帰ってきても、母はずっと田圃に出ていて、独りでいるのがさみしかったと言う。妻には、専業主婦でいてもらいたいと思っていたらしく、考えが一致して、それで結婚した。

栄養学を応用できるのは主婦が一番、だから「家事は私の仕事」と華美は割り切ることにした。仕事ならお客が少々変なことをしても怒れない。

しかし最近、耳鳴りがするようになり、加えて、変な夢を見ることも多くなった。若いときは、眼をつむるとすぐに朝が来た。夢を見ることなどまったくなかった。しかし、この頃はやたらと夢を見る。しかも、それをはっきりと憶えている。

華美は食卓用のテーブルに座りながら、昨夜の夢を思い出す。華美の家に強盗が入り、華美を縛っている。夫もいるが夫は彼女の横でいくら声を出しても眠っている。強盗はどんどん華美の時計やネックレス、お気に入りの洋服、財布の中のお金、引き出しに隠したあった家計のお金などを奪って逃げた。と、その瞬間、今度は自分が溶岩の中に閉じ込められた火になっている。溶岩は流れながらどんどん冷えていき、そのため、火の自分も冷えていく。これでは、もうすぐ冷えた石ころになってしまう。泣きそうになり、ふっと目を覚ます。

眠気まなこで周りを見回すと、一方の壁には本箱が置いてあり、夫の難しい専門書が整然と並べてある。本の終わったところからは、これも夫の買ってきた透明なＣＤのケース

がきちんと並べられている。夫もやろうと思えばできるのだ。でもテーブルの上にはいろんな物が雑然と置かれている。どうしてそこはきちっと出来ないの？

そんなことを考えていると、「じゃ、行ってくる」と玄関の方から夫の声がする。華美は慌てて玄関へ向かう。夫はすでに外に出ている。ドアも閉まりかけている。突っかけを履いて、ドアを再び押し戻し、「行ってらっしゃい」と言う。「夫が仕事に行くときは必ず見送るのよ」と母がずっと言っていた。

「ああ」と言いながら夫はこちらを振りかえり、手を振る。見送りをたいへん喜んでいるようだ。

キッチンに戻り時計を見た。七時四十分。娘のミハルは自室に戻り、学校への用意をしているのだろう。学校は八時半から、ミハルはこちらから何も言わなくても決して遅れることはない。八時きっちりに出かける。これも華美の躾の成果だと思っている。

ふと、いい子ほど危ないと、いつかテレビの教育番組で精神科のお医者さんが言っていた。そんなことがあるものか。いい子はいい子なんだ。

ミハルが自分に近づいてきて柔らかな掌に何かを握っていて、それを渡そうとする。

「これ拾ったの」と言う。

「何、これ」

華美は渡されたものをじっと見つめる。なんだ、安物のライター。

「なんだかそれを持っているのが怖くなった。私、今朝、夢でそのライターを使って、この家に火をつけようとしたの。でも、ライターの輪っかをいくら回しても火がつかないの。それで、止めた。きっと安田君とのことがあったからだと思うわ」

「安田君って、あの安田医院の息子さんの。クラスで一番の子でしょう」

「そう。安田君がね、学校が終わって帰るとき、おもしろいことをするから付いておいでと言うから村田君といっしょに付いていったの。そうしたら、公園の前のマンションがあるでしょう。あそこのゴミ集積所から、紙のたくさん入ったゴミ袋を捜して、いくつかを公園へ持って来たの。そして、その中から紙くずをひっぱり出して、山のように積んで、ポケットからライターを取り出して、火をつけたの。火は大きな炎を出し、すぐに黒い小さな欠片を空に吹き上げたの。煙も出た。火っておもしろいなあって思って、私も傍にあった紙くずを火の中に投げ入れたの。楽しかった。でも、紙がなくなりかけ、火の力が弱くなりかけたとき、安田君が『今日、テストを返してもらっただろう。あれを燃やさないか』と言った。村田君が『ああおもしろい。燃やそう』と言って、ランドセルを置いて、国語と算数のテストをすばやく取り出した。安田君も同じことをした。安田君は両方とも９６点がついていて、よくできました、と赤ペンで書いてあった。村田君のは８５点と８０点だった。『ええい、こんなもの』と安田君が最初に二枚とも丸めて火の中に放り込んだ。わあもったいない、いい成績だったのに、と思ったの。それらは朱色の炎を出して燃えだし、安田君はうれしそうに眺めていた。『これも燃やしちゃえ』と言ってランドセルから、テストの紙を何枚も出した。『それ、塾の？』と村田君が尋ねた。『うん』とおもしろくなさそうに返事した。それも、全部９０点以上だった。『１００点でないとうちの父も母も喜ばない。あなた、なぜ、こんなやさしい問題、間違うの。ケアレスミスじゃないの、と怒鳴るんだ。医者にはケアレスミスは許されないぞ、と父も怒鳴るんだ』と言ったの」

「それで、あなたも燃やしたの」
「違うよ。ミハルも燃やせと村田君が言ったの。『燃やさないよ』と私は答えた。でも本当は燃やしたかった。『勇気なし』と村田君が言った。『ミハルは１００点なんだよ』と安田君が言った。私は黙っていたの」
「それで、そのテスト、まだ私たちに見せていなかったわね。１００点だったの」
ミハルは首を振り、「これ」と差し出す。そして、すぐにランドセルを背負い、玄関のドアを開けて出ていった。
見ると、国語８０点、算数６５点だった。なにこれ、村田君より負けている。それに、算数の間題で違っているところは、テスト前に華美が教えたところだった。自分の前ではできていた、分かったようだと思ったのだ。でも、できていなかった。教えただけに、腹がたった。「これ、教えたところじゃないの、なんでこんなところを間違えたのよ」。苛だつ。何かを壊したくなるほど苛つく。耳に意識を持っていかないのにジージーと音が聞こえる。　不機嫌のまま、朝食の後片付けを済ませ、ゆっくりとインスタントコーヒーでも飲みながら新聞でも読もうかと思って、鍋に水を入れて沸かそうとした瞬間、玄関からチャイムがなった。
「吉本です」の声。吉本の奥さん。何だろう、朝の早くから。
「もう、そろそろ行かないと」と奥さんの声がする。
「どこへ」と思う。
「奥さん、昨日、行くと言っていたでしょう。新聞に挟んであったスーパーの広告を見たと言ったじゃない」
「ええ見ました。そう答えたと思います」と嘘をつく。
「ちょっと遠いけど、丸花スーパーが今日、安売りをするって書いてあったでしょう。タマネギもジャガイモも白菜も大根もキャベツもよ、それに福井産のコシヒカリなんか、５キロの袋で五百円も安くするそうよ」
吉本さんの奥さんと昨日どこで会ったのか、記憶にない。嫌だ、やっぱりこの頃、ある時間だけ、後から思い出せない。記憶にないのだ。ときどきそうなる。どうしよう。もう、認知症にでもなったのかしら。
「スーパー丸花。行くでしょう、ちょっと遠いけど。昨日、レストランの前で出会ったとき、私が新聞に挟んであった広告のことを話し、明日、あなたも、朝早くに行くって言ってたじゃない」
「ええ、そのつもりです」華美は慌てる。
「早く行かないと。いい物がすぐになくのなるのよ、あなたもそう言っていたでしょう。それに、車で行くって、たくさん買うって」
「ええ、はい」
「車で行くのなら同乗させてくれない」
「ええ、どうぞ。でもちょっと待ってくださいね、支度するから」
「ああ、うれしい。助かるわ」
昨日、自分を捕まえて、スーパーに行くように勧めたのは、車に同乗しようという目的だったのかと想像する。しかし、どこで会ったのか、どんなことを言ったのか、まったく記憶にない。

華美は急いで、財布やバッグなどを用意する。
コーヒーをゆっくり飲み新聞を読むのは諦めた。それより、買い物に行く方が精神状態にはいい。みんな働いている時間に自分だけ新聞を読んでいるなんてなんだかいつも罪悪感を感じてしまう。こんなことをしていていいのかしら、他にもっとすることがあるのじゃないかと思ってしまう。恐れとも不安ともつかない奇妙な心の揺れを覚える。だから、吉本さんの奥さんに誘われて買い物に行くほうがいい。買い物は決して悪いことではない。そう思った途端、またも耳鳴りがひどくなる。ジージージー。
何だって吉本の奥さんに自分が狙われたの？　専業主婦だから？　この辺で専業主婦は吉本さんと自分だけ。
だめ、だめ、そんなことを考えていては。早く支度をしなければ、吉本の奥さんはきっと言いふらすわ。「あのひと、するとことがのろいのよ。人の二倍はかかるわね」と。

車の中はもう秋も中旬なのに蒸し暑く感じる。まるで梅雨のような不快な気分になる。でも、スーパーに行くのが決して不快じゃないよ、と自分に言い聞かす。
「スーパーが開くのは九時だけれど、特売の日は八時半からなの。遅れるといい物がなくなるのよ。だから、開店直後に行かなければね」と吉本の奥さんが言う。
もっと速く走ってよ、でないと、買いたい物が買えないよ、と言いたそうだ。でも、街の道路は混んでいる。出勤の車が走る時間だ。慌てたら事故を起こすよ。
「大丈夫です。開店時刻に間に合いますよ」華美は自分の言葉にケンがなかったかと恐れる。せっかく恩を売っているのだから、最後までそれを通さなくっちゃ。
電車の乗降口が近くにあるらしい。多くの男女の高校生が一群となって出てくる。まるで道路脇から泥水が吹き上がってくるようだ。しかも、同じような服装をしている。以前は、女生徒が白いルーズソックスを穿いていて、なんだか気持ちが悪かったが、今は誰も穿いていない。でも、制服は同じだ。
制服と言えば、サラリーマンと思われる男たちの衣服もどれも同じ。紺か黒っぽい背広で黒か褐色の革靴。これらは明治以来ずっと変わっていない。古い映像で当時の男たちの服装を見ると、今と変わっているのは帽子だけで、他は同じ。今でも、赤や黄色のカラフルな衣服を着て勤めにいく男なんかいない。背広を着ていない大人の男たちは薄汚れたベージュ色のジャンパーに、ジーパンか、着古された綿パンが多い。
華美は自分の衣服にも目をやる。平凡な衣服だ。黄色いシャツの上に、ニットのセーター。下はジーンズ。これといった特徴がない。でも、これでいい。これが自分のスタイル。信号のためだろう前の車が止まった。大型トラックだ。トラックの荷台が檻になっている。そこにたくさんの豚が積まれている。日頃見る豚はお尻辺りに泥を付けていて汚らしい。だが、前に見える豚たちはみんなきれいに洗われている。真っ白な薄毛の中に少しピンクがかった肌が透けて見える。豚たちは不思議と声をださない。静かにしている。
この豚たちはみんなこれから殺されに行くのだろう。美しく洗われているのは、食肉用にするための準備なのだ。私たちが行くスーパーにあの豚たちはすぐにパックにつめられた豚肉となって現れる。ああ、あの美しい豚たちはもうすぐ大量に殺され、血が飛び散る。最後に声を上げるのだろうか。
突然、胃がおかしくなり。嘔吐しそうになる。嫌だ、今日は絶対に豚肉は買わない。し

かし、ひょっとして自分たちだって？　誰かのために殺されつづけているのかもしれない、肉体的にではなく、精神的に、徐々に徐々に。するとそれらが本当のような気がしてくる。怖くなる。

華美は少しの間ぼうっとする。運転中の放心状態は危険極まりない。

携帯のベルが鳴る。隣の奥さんが慌てて服のポケットからそれを出して耳に当てる。

「ふん、ふん、分かった。今、どこ」

……

「こちらはね、今、車で移動中。電話切るね」

奥さんは電話を切り、携帯をポケットにしまう。

「娘からなの。娘は大学に行っているのだけれど、クラブもやっているので、買い物の要求」

奥さんはそれがたまらなくうれしそうだ。頬が急に明るくほてったような気がする。携帯電話で指図か。そう思った瞬間、以前、風邪をこじらせて肺炎になり、病院に入院したときのことを思い出した。酸素マスクを口に当てられ、腕などにいろんな器具が取り付けられ、器具から伸びる線がベッドの後ろのコンセントにはめられていた。きっと、ナースステーションにある機械とつながり、そこで監視されているのだと思った。その証拠に華美が起き上がり、うなだれていると看護師がすぐに現れて、どうされたんですか、苦しいのですかと尋ねにきた。どうして起き上がるのが分かるのだろう。それはきっと腕などに巻かれている器具からか、それとも病室にカメラでも置いてあるからだろう。

それに、眠っているとき、自分の身体が各病室を鳥のように飛び回っている夢を見た。飛び回るのが苦しくて、それを止めたいと思うのだが、決して止められなかった。ははん、当直の看護師が退屈紛れに、機械を操作し、眠っている華美の意識を操作しているに違いない。夢の中でそう思えてならなかったし、目覚めてからもそう思った。それで、なんとなく、朝にやってきた看護師に、自分が付けている器具で、意識に作用を及ぼすような器具があるのかと尋ねてみたが、華美の質問が理解できないのか、首を傾げ、心拍数や、酸素濃度を調べるだけの器具だと説明した。だが、あの夢は誰かが外から支配していて、そういう夢を見させたに違いないと思えてしかたがなかった。このような夢を打ち切ろうと必死になっているのに、止められなかったのだから。

と、今も、どこからか電波が自分に送られてくるような気がしてならない。「もう少し、ゆっくりと走れ、でないと事故を起こす。絶対にゆっくりと走れ」そう命令してくる。だから、一段と速度を落とした。それで、他の車が何台も華美の車の横を追い抜いて行った。これって統合失調症の症状だ。いいえ、違うわ。これって誰でも、何から、または誰かから指図されるってことじゃない。命令は、いつでもどこからでもやってくる。

「ああ、ちょっと、その道端に車が止められない」

突然、奥さんが吠えるように言う。そらね、命令がやってきた。

華美はブレーキを踏み、ゆっくりと道の隅に車をやる。道幅が広いので、車を止めても邪魔にはならない。

「娘に頼まれたもの、あそこの店に寄って買うわ、ごめんね。すぐ帰ってくるから、いい？」

「ええ、どうぞ。ごゆっくり」

あんなに速く走れと言っておきながら、それはないでしょう。
奥さんはいそいそしている。車を降り、左右を見回し、道路を横切って、対面にある店へ走って行く。
かなりの時間が経った。でも奥さんは戻ってこない。どうして？
中年ふうの男が小走りにこちらに向かってやってくる。店の男のようだ。男の髪型はソフトモヒカン刈り。傍にやってくると想像よりかなり若そうだ。おそらく店員だろう。店員を使い走りにできるなんて奥さん、かなりの常連客なのか。
「吉本さん、もう少し時間がかかるそうで、お先に行っておいてということです」
ええ、何だって、これだけ待たせておいて。自分で言いにもこないで、それはいくらなんでもひどすぎるわ。ひどすぎるよ、ほんとうに。華美は男を睨み付ける。
「申し訳ないって、そう言っておいてほしいということです」
「そう」
自分が来るのが嫌なものだから店員に頼んで告げにこさせたのだわ。
怒りが身体全体を突き抜け、車を急発車させようとするが、かろうじて、それを止め「ありがとう」とその男に頭を下げ、ゆっくりと発車させる。
彼女が急がせたのはあの店に来るためだったのではないか。そう思った途端、先日、夫の頼みで市内の中心部にある図書館に予約の本を取りにいったとき「あれ、吉本の奥さんじゃないの」と思った。奥さんが対面の歩道を背の高い中年ふうでソフトモヒカン刈りの男と手を組んで歩いていた。女性の方はロングの髪で、後ろでゆるあみにしている。あの髪型をしている人は少ない。吉本の奥さんに違いない。でも、遠いので顔がはっきりとは分からなかった。いいえ、あの奥さんに限ってご主人以外の男と手を組んで歩くなんて考えられない。きっと人違いだ。……。あのときはそう思った。でも、今日の服装はあのときと同じだ。今気づいた。男と今の店で待ち合わせをしていたのだ。店の一階は女性用衣類や小物の店だが、二階には男性用衣服も置いている。男性から衣服を買うので見立ててほしいと頼まれたのかもしれない。先ほどの携帯電話は娘からではなくあの男から？　でも、サラリーマンなら今頃は自由な時間がない。夜のお仕事か、それとも日曜出勤で、今日が代休かも。そうだ。先日、奥さんを見かけたのも月曜日だった。それに、今の男、髪型がソフトモヒカン。
先ほどの電話、あの男からか！　「今、〇〇店に来ている。出てこれないか」「ああ，分かった、今ちょうどいいぐあい。そこを通るところ」
やるわね。吉本の奥さん。そう思うとなんだか興奮する。自分が興奮するなんてどうかしている。今までにあまり感じたことのない興奮。まるで自分がそうしているみたい。馬鹿げているわ。ただの自分の妄想じゃないの。
突然、今度は華美の携帯が鳴る。今、運転中、出るべきではない。出るのをじっと我慢する。慌てて車を路肩へ移動させ、車を止める。でもすでに、携帯が切れている。着信履歴を見る。学校から。ええ、学校から、どきりとする。慌てて返信を押す。電話が掛かった。「上町小学校ですが」歳のいった男の声。
「四年一組の丸山ミハルの母親ですが、今しがた、そちらからお電話をいただきました。何かミハルにあったのでしょうか」
少しうわずった声で言う。

「ああ、分かりました。細井先生、丸山ミハルの親御さんから」
「電話を替わりました。丸山ミハルちゃんの担任の細井です。ミハルちゃんのことでちょっとご相談したいことがあるので、今日の昼休みの時間に学校にきていただけませんか」
女性の声だ。
「ミハルが何か」
「ええ、ちょっと」
「分かりました。お伺いします」再び、うわずった声で答える。
動揺が治まらない。何だろうか？　ああ、きっと安田君のことじゃないかな。そうに違いない。あのことならすでにミハルから聞いている。ミハルに何の落ち度もない。そう思うと少し心が落ち着く。ミハルが親を呼び出すようなことをするはずがない。テストだって燃やさなかったのだし、いい子なんだから、動揺することなんか何もないはず。そう思うと心がかなり落ち着く。
車を再び、スーパーに向かって走らせる。

値引きのある特売日はレジが混む。買った食料品を乗せたカートを押して列の後ろに並び、そこからレジを見つめる。すると、先ほど米の売っているところを尋ねた女店員がレジ係と何か話をしている。それで列が進まない。またもやあの能なし店員が！　と苛つく。
先ほど、あの店員を見つけて「米のあるところはどこですか」と尋ねたら、こちらですと言って米の袋の積まれているところへ案内してくれた。確かにそこは米の売場だった。でも、特売の米がない。尋ねたのは特売の米の売っているところだ。普通、そのくらいの機転は利くはず。イラッとする。ムカつく、何という能なし店員。再び「特売のお米の売っているところよ」と声高に尋ねようとしたら、もう女店員はそばにはいなかった。ええい、もう、お米なんか買ってやるものか。
番が来て、品物の一つ一つのバーコードが読み取られ、値段の計算がされた。高級ワインが取り上げられた。あれ？　それをカートに入れた覚えがない。どうしたのだろう。済みません。それ、無しにしてください、と大声で叫んだ。レジ係は、うるさそうにそれをはねた。さらにいくつかの買おうと思ったことのないものが混じっていて、それらもはねてもらった。レジ係は何も言わなかったが、華美は紅くなった。「済みません、済みません」と何度も言った。
買った物をエコバッグに詰め、重いバッグを片手で持ち、身体を斜めにして店を出て、車を駐車させているところに向かおうとした。重さで腕が痛い。これならカートに乗せたまま車まで行けばよかった。でも、カートを返すのがおっくうなので、手持ちにしたのがミスだった。
華美の前を、老婆も、重そうにショッピングカートを引きずりながら、通り過ぎようとした。と、彼女の後ろから茶色のジャンパーに黒ズボンの中年の男が走って来て、彼女に追いつき、彼女の前に回り、「ちょっと、おばあちゃん、止まって」と、カートに手をかけ素早くそれを老婆から引き離した。
その声を聞いた途端、華美自身が呼び止められたようにギクッとし、足がガクッとして、身体を泳がせ、持っているエコバッグを放しそうになった。
「すみません。ちょっとこっちへ来てくれんか、調べることがあるから」と強い声だ。

「何するねん、ちゃんとお金払ったやないか」
老婆は、カートを奪い返そうとする。
「だから、それを調べるから」
男は片手でカートをしっかりと握り、もう一方の手で老婆の腕をつかんで引きずるようにして店に向かう。
華美はその後を付いていく。老婆を助けてやりたいという気持ちになる。おかしいな、どうして身も知らない老婆にこんな気持ちになるなんて。普通なら、一瞥するだけで、自分の車に向かっているはずなのに。
「あんた、なんでこのおばあちゃんについてくるの」男が振り返って言った。
男の目が鋭く華美を襲うような気がしたが、それに耐えた。
「このおばあちゃん、私の家の近所のおばあちゃんです」
まったく考えもしなかった言葉が出た。何かに命じられて出てくる。
「ええ？」
「それに、これ、拾ったから」
サラリーマンや店員さんがよく名前を書いて首からぶら下げているビニール製の「名札入れ」を見せた。これは以前、ＰＴＡの何かの会合で、首からぶらさげるように言われて、返し忘れたものだ。家に持ち帰り、冗談半分に、自分の住所と、電話番号と、お願いの文章を書いて、ショルダーバッグに入れておいたものだ。まるでこんなことが起こることを予想していたみたいだ。不思議なことだ。
「これ、なんや」
「おばあちゃんが首からはずしてポケットへ入れようとして落とされたんです。おばあちゃんは認知症です。それで、変なことをしたり、帰り方が分からないようになったら電話してほしいと書いてあるのと違いますか？」気の利いた言葉が自然と出る。まるで何かに操られているような気がする。先ほど思い出した入院中に見た夢のように。
男は名札をじっと見る。老婆は不思議そうに華美の方を向いた。華美は、瞼をしかめて合図を送った。老婆は怪訝な顔をするだけだった。
「おばあちゃん、名前、なんと言うの」
監視員の男はカードを見ながら尋ねた。華美はギクッとする。自分の名前が書いてあるからだ。
「分からんなあ」老婆が答えた。
「名前まで忘れたんか」
「分からん」
老婆は華美の思惑をすでに察知したようだった。勘のいい老婆だ。男が店の方を向いた隙に華美の方を向いてにやりとする。
二人は店の奥の部屋に連れていかれた。
「あなたが金を支払ったのはこれとこれだけ」
監視員はレシートのような物を出しながら指さす。
「レシートを持ってるか？」と尋ねる。
「そんなもの捨てた」
「じゃ、これで確かめよう」

男は、ショッピングカートの中から、品物を取りだし、さらにショルダーカートの袋の横に付いているペットボトル入れに手を突っ込み三つのチューブを取り出す。生わさび、生しょうが、ねりからし。色が草色、黄色、橙色とわかれている。
「やっぱり、これとこれとこれが、金払ってないやないか」
「そんなことはないはず。みんな店の籠に入れて、見せた」
「言い訳をしてもだめ。防犯カメラに、おばあちゃんが万引きするところがちゃんと映っているのだから。おばあちゃん、ほんまに認知症か」
監視係の男がショルダーカートの袋の横のペットボトル入れを指さす。
「これに入れるのが、それ、ここに映っているやろう。それに、この映像、これはレジで金を払うところや。ここからペットボトルは出しているが、これらは出していない」
「ああ、今思い出した。それらを出し忘れたんや。出し忘れただけや。でも、よう見なかったのはレジ係のひとも同じやで。レジのひと、バッグの中を覗いているやろう、ほら、だったら、なぜ、横も調べなかったんや。それは彼女の責任や。わいは全部見せたつもりや。それなのに、よう見つけんかったんはレジ係のひとや」
「おばあちゃん、ほんまに認知症か？」またも言う。
「ちょっと、監視係のおじさん、認知症は正気のようなときもあるのよ。おばあさんの言うとおりよ。レジ係が、なぜペットボトル入れを見なかったの。店にも責任があるのと違うの。このおばあちゃん、正気なときをみはからっていつも買い物に来るの。自分用の小さなショッピングカートを引いてここのスーパーに。でも、普通のひととは少し違うのよ。買った物は全部、自分のカートに入れたと思ってしまうのよ。だから、レジでは品物を全部出したと思ったのよ。そこに入れたのを忘れただけよ。それを万引きやなんて、人権侵害もいいとこやわ。このスーパー、認知症のひとでも犯人扱いするんですか。警察に突き出すんですか。ただ出し忘れただけのおばあちゃんを。普通の老人だって物忘れがひどくなるものよ。物忘れをしてないか注意するのが店の責任というものよ。この映像、ショルダーバッグの中を覗いているわ。でも、袋の横のペットポトル入れを見ていない。何故見なかったのよ、レジ係にも責任があるわ。大声で怒りの言葉がほとばしる。
「金を払わず、外に出たら万引き。規則は規則や」
監視係の男が答える。
「おばあちゃんの家族のひとがお願いしているやないの。これ見なさいよ。このカードを。認知症でご迷惑をおかけするかも知れませんが、何とぞ、よろしくお願いしますって、これ、そう言う意味と違うの。それでも警察へ渡すんですか。このスーパーは、血も涙もないスーパーですね。認知症を患っていて、少しでも出し忘れたら、警察へ送られる、このスーパーは儲けるためやったら何でもする。みんな気をつけなさいよ、と今から店に戻って、怒鳴り散らすわ。警察へ突き出したところで認知症だったらすぐ釈放してくれます。あなた、捕まえた万引き犯の数を増やそうとしただけでしょう。自分の成績を上げるために、物忘れしそうな人を狙って万引き犯に仕立てて。口コミって怖いのよ。それとも、このお店、店員の躾がよくできている。親切で丁寧で、とてもいいお店だと言われるのと、どっちがいいのよ。どっちを選ぶの、あなた」
華美は強い調子で言う。不思議だ、こんなにすごんでみせるのなんて初めて。いいえ、これは自分の言葉ではないわ。身体の、いいえ、脳のどこかが割れていて、そこから吹き

上がってくる感じ。嫌だ、自分が自分でないみたい。
「分かった。分かった。認知症か。しゃあないな。これどうする。金払う？　それとも商品返す？」
老婆は黙っている。
「私、払ってあげる、乗りかかった舟だから。いくらやの」
「それ、レジで頼むわ」
男は不満そうな顔をして言い、老婆はさっさと部屋を出て行く。
華美は金を払い、店を出、老婆に「よかったね、もう万引きなどしなさんな」と言った。老婆は「助かったわ。ありがとう」と言うと、ショッピングカートを引きずり、まるで怒ってでもいるかのようにこちらを振り返りもしなかった。きっと万引きが成功しなかったことを嘆いているのだ。
華美は荷物を地面に下ろしてから、財布を入れようと肩から斜めにかけているショルダーバッグを開いた。ええっ？　これなに！　と思わず声をあげた。ショルダーバッグの底に、老婆が万引きしたのと同じ品物が入っていた。
いつこれを。立ち止まって考え込む。確かに、先ほどレジで思いもよらないものがカートの籠にいくつか入っていた。でも、それを買った覚えがない。とすると、……ひょっとして老婆がこれらをペットボトル入れに入れたとき、ああ、万引きするなと思って、自分も彼女と同じようにこれをショルダーバッグに入れたのではないか。
以前、スーパーに行き、これ、今だったら万引きできるなあ、と何度も思った。一度ぐらいやってみたいとも思っていた。
これはやはりいけないわ。こんなことをしていては、万引きが癖になる。返しに行こうか？　でも、自分はこの金を払ったとも思えてくる。お金を払ったレシートを今ちゃんとこの手に持っている。万引きをしたのはあの老婆だ。自分は彼女を助けてやっただけ。それに、こんな品、たいした値段のものじゃない。泊まったホテルの風呂場から備え付けの櫛やタオルを持って帰るのと同じようなもの。それに自分のやりたいことをするには、例え悪い事でもやれる勇気がなければやれっこないと思っている。なぜって、やりたいことの多くは世間では悪いことと思われているからだ。自分も悪い事ができたんだ、と思うとうれしくなる反面、やっぱり後味が悪い。
車の後ろに買った物を置き、運転台でしばらくぼうっとしていた。
ああ、そうだ。買い物や老婆のことに気が取られ、ミハルのことを脇に置いていた。ミハルはいったい何をしでかしたのだろう。ミハルを信用していたのでたいしたことではないと高をくくっていたが、ひょっとしてとんでもないことをしでかしたのではないか。心配になってくる。老婆のことで時間を費やしたので、かなり昼時に近づいた。
慌てて車を発車させる。
家に帰り、昼食をパンだけで済まし、徒歩で学校に向かった。しらずしらず耳に意識をやるとジージーと強い音が鳴っていた。耳鳴りを聞きながら、四年一組の教室に行く。給食当番の子供たちが給食の後片付けをしていて、それを三十代前半と思われる細井先生が見守っていた。細井先生は中肉中背で足が長く、ニットのセーターにジーンズのパンツ。動きが敏捷で、スポーツ選手を思わせる。ただ、以前に会ったときとは違って、ショートヘアーの髪型を茶色に染め、眼には短めの付け睫毛をつけ、爪には濃いマニキュアをして

いる。学校の先生は皆、黒髪で、つけ睫毛などはせず、マニキュアもしていないと勝手に思っていたので驚いた。でも、悪い気がしなかった。むしろ好ましかった。自分はミディアムな髪型の黒髪で、つけまつげも、マニキュアもしていない。それに化粧も薄くしている。厚化粧はだめ、品性をおとすからと母がいつも言っていた。それが身にしみている。

細井先生は自分を応接室に案内し、お互いに広いテーブルを挟んで座った。

「ミハルちゃんなんですけど、この頃昼休みに、どこかに消えちゃうんです。マイクで呼び出しても決してやってこないんです。それに、教室に帰ってくるのは、いつも十分ほど遅れるのです」

「学校にいないということですか」

「それで、どこへ行っているのかと尋ねると、漫画を静かなところで読みたいので、学校の中でそんなところを捜して読んでいる、と言うのです。学校のマイクで呼び出しても来れないのは、読み出すと本に夢中になって何も聞こえないから、と言うのです。先頃は物騒ですから、もし、何らかの事情で、学校にいないということになるとたいへんです。一応、学校は塀に囲まれていて、外へは出られないようにはなっているのですが、どこかに抜け穴があるか、塀を乗り越えて出ていくのかもしれませんし」

「へええ。あの子がねえ、塀を乗り越える。そんなことができるとは思えませんけれど」

ややっっけんどんに言う。

「お子さんは、家と学校とでは違いますからね。それで、同学年の先生に頼んで、みんなで手分けして学校中を探してもらったのですが見つかりませんでした。それで、お母さんに本当にどこへ行っているのか確かめてもらいたいと思いまして。もしも、外へでも出ていたらたいへんですし、即刻、やめるように注意していただかないと」

「今日もどこかへ行っているということですか」

「そうだと思います。最初は週に一、二度だけだったんですが、この頃は毎日です。困っているんです。私も授業の準備がありますし、毎日、探し回るわけにはいかないし」

「帰ってくることはくるんですね」

「それはそうですけれど」

先生は不服そうに答える。

いったいどこへ行っているのだろうか、不安になる。きっと学校の外へ出ているに違いない、と思う。子供を家と学校に閉じ込めておくことなどできない。それは刑務所内に縛り付けておくようなもの。それへの反抗をしているのではないか。

危ないことは事前に防御することも重要かもしれない。そのため生徒や子供を親や先生の手の届くところに置いておきたい。それには、子供に携帯を持たせ位置情報をキャッチし、絶えず子供の位置を察知する必要がある。でもそこまで管理しなければいけないのだろうか。そんなことをすれば、子供はいっそう自由になりたいと思うかも知れない。携帯を放りだしてどこかへ行ってしまうかも。複雑な気持ちが心の中で舞う。ただ、根拠はないが、ミハルはきっと学校から外に出ていると思う。そうに違いない。

「聞きただしてみますし、それに心当たりのところは探してみます」

「そうしてください。分かったら、ぜひ私にしらせてください」

「分かりました」

華美はいそいで立ち上がり、応接室を出た。つづいて出てきた細井先生に振り返りなが

ら「たいへん、ご迷惑をおかけし、申しわけありません」と深々と頭を下げた。そのとき、例のジージーの耳鳴りが強く鳴った。

華美は学校の周囲を回り始めると、突然「お昼の休憩時間、私の自由な時間でしょう。何をしようと勝手でしょう。家に帰れば宿題、それに母さんの勉強が待っている。『みんな今頃、塾に行っているのよ。だからお母さんといっしょに勉強しましょうね』って。それに、お父さんの帰ってくるのが遅いので、夕方遅くまで勉強し、それが済んだら夕食の手伝い。料理の仕方も学んでおかないと大人になったら困るのよ、夕食の後、ちょっとは自由な時間があるじゃない、と思っているかもしれないけれど、外は暗いしどこへも行けない。または出してももらえない。家の中での自由時間、そんなのは自由時間じゃない。いちばん自由な子供時代なのに自由に時間を使えない。昼休みぐらい自由に時間を使わせてよ」とミハルの声がする。

「でもねえ、お母さんだって、自由な時間なんてないのよ」と叫びたくなる。「こんなふうにあなたを探し回らなければならないのって、私はあなたに縛られているってことでしょう」

お互いの縛り合い。これって何？　家族って縛り合う関係？

「この頃の子供はちょっとでもみんなと違ったことをしたり、みんなに逆らうようなことをするといじめに会う。だから四六時中緊張している。それに、親ぐるみの付き合いもない。休みの日に近所で遊ぶこともない。ただ学校だけの付き合い。だから気の置ける友人ができない。絶えず気を遣う。ストレスが溜まる。イライラする。いじめで発散させようとする」これってテレビで聞いた話かな。

子供がイライラしているだけじゃないよ。主婦だってイライラしている。そのイライラをみんなどこで発散させているのだろう。ネットで調べたら、「おいしい物を食べる。昼食をときどきレストランで食べる。女子会をする。友達と愚痴の言い合いをする。ショッピングをする。ときには自分用の高価な買い物をする」以上がストレス解消法の上位の方法。そんなことで解消できるのならたいしたイライラではない。若い男と浮気をするぐらいを一番に挙げてほしい。ホストクラブに行くや万引きをするも入れてほしい。でも、万引きはびくびくしなければならないし、後味もわるい。浮気もホストクラブも、自分には興味がないし、そんなことをすれば、お金がかかるし、相手にも気を遣う。逆にストレスが溜まり、何にもならない。……。だったらどうする？

なんだか変なことを考え始めた。それよりも早くミハルの居所を見つけなければ。

絶対見つけてやる。母親の威力を見せつけてやらなければ。やっぱり、お母さんは違うわ、たちどころに居所を見つけるんだから、そう細井先生に思わせてやる。

辺りを見回す。対面のところに小山が見える。それはずっと彼方につづいている山脈のはずれのところだ。あそこの頂上辺りに、市が作った展望台がある。そこへミハルを連れていったことがある。ミハルは驚くほど感激していた。あの辺りにいるのではないかと思う。華美は躊躇なくそこへ向かって歩きだす。

三、四分で登り口についた。登り出すと細い山道は、両側が壁のようになっていて二つの小山に挟まれた谷底を登っていくような感じ。しかもかなり急だ。上を見上げると、杉の木立だろうか、枝の葉っぱが頭上をやさしく被い、酸素の多い緑色の空気を落としてくる。立ち止まって深呼吸をする。ミハルを見つけなければ、と焦っていた思いが少し和ら

ぐ。ここでじっとしていたいよー。葉ずれの音を伴って風が心地よく肌をなでる。でも、すでに足が動き出す。これっていつもの習性。

微かな音が聞こえてくる。ふうん？　空気がこすれるほどの音。あれは何の音？　太鼓の音ではない。でもそれに似ている。葉ずれの音にさえ消されてしまうほどの小さな音。でも確かに聞こえる。こんなに自分って音に敏感だったの？　リズミックな音が聞こえたかと思うと、不規則な音に変わる。音の方角を探る。そうだ。この上に、なんだかよく分からない建物があった。あそこからの音、そう思うと、聞こえてくる音は床を強く踏む音だと気づく。

とりあえず、あそこへ行ってみよう。展望台への道から左へずれた道を音に引かれて上っていく。音は以前より強まっていく。ようやく広場になっているところに着く。そこには道場のような感じの建物が一棟あった。音がそこから聞こえてくる。硝子窓のところへ行き、背伸びして中を覗く。数人の女の子が白い上着の裾に赤いひらひらのついた短いスカートを穿き、踊っている。前には大型の鏡が壁にはめ込まれている。それらを見ながら踊っているのだろう。音楽は鳴っていないのに音に合わせているような感じ。足や手の動きが柔らかで、素早く動く。三人いっしょに踊っているが、その動きが一致している。

そういえばこの向こうに中学校があったことに気づく。この辺りは、中学校の裏側にあたる。市長が何らかの計画のもとにこの建物を建てたのだろうが、市長が替わり、それが中断し、今は中学校が管理し、副体育館のように使っているのだろう。ダンス部の少女たちか、それとも、ダンスの好きな女の子たちが、昼休みに使っているのだ。

三人のダンスが終わった。すると中学生とは思えない小さな少女が叫ぶ。「超格好いい。マジよき、マジよき。先輩、すげえよ。よいちょまる。よいちょまる」

踊っていた少女たちは、瞼から太陽の光を発散させる顔つきで答える。「あざお、あざお」

ふうん。中学生でもあんな小さな女の子がいるのだ。でも言っている言葉が分からない。彼女たちの暗号なのだろうか。

「次、ちびちゃん、一人で踊れ」

一番背が高くて、足の長い、美少女コンテストで優勝しそうなスタイルの女の子が叫ぶ。電灯が付けられていないし、日陰で窓からは光が入ってこず、それに上部の窓には黒いカーテンが引かれているので、顔がよく見えない。でも、かわいいに違いない。鼻筋だけが美しく光っている。ただ、男言葉だけはいただけない。もう少し、少女らしく喋ってほしい。

「一人で？　マジで！　マジで！」と一番背の低い、小学生のような少女が声を挙げる。さらに彼女が「ヤバいよ、ヤバいよ」と言いながら、鏡の前に立つ。少女の顔が真正面に映る。

「ええっ！　ちょっと！　あれ、ミハルじゃないの？　……間違いない、ミハルよ」

ミハルがすぐに踊りだす。周りを取り囲んでいる少女たちは身体をゆすり始める。ミハルは先ほどの少女たちよりもさらに柔らかな手さばきと身体のねじりを混ぜながら踊る。楽しそう。あのような活力をみなぎらせているミハルを見たことがない。よく見ると、耳栓のようなものがはめられている。他の少女も皆、そのようなものを耳に付けている。分かった。あれは、スマホから音楽を聴いているのだ。だからみんなの調子が合うのだ。だ

ったら、ミハルはどうしてスマホを、またあのスカートをどこから手に入れたの？　自分に隠して夫が買ってやったの、そんなことはないわ。夫が一番、規則にやかましいはず。しかもスマホはミハルの小学校では禁止だ。位置情報を知りたいから持たせてやってほしいという保護者に、そのかわり、登下校の道の様々なところに、保護者が立って見張りをするからと言って、それを退けた。フリルのついたスカートは先輩にもらったのか。でも、それではぷかぷかで、誰かが縫い直したのに違いない。スマホとスカート、これはぜひ、ミハルに問い質さねばならない。自分の知らなかったミハル。少し怒りが生じる。

ミハルの踊りが終わったところで、みんなが拍手をする。心を込めての拍手だ。それが、広い室中を跳ね回る。「マジよき、マジよきよ」みんなが叫ぶ。ミハルは紅い顔になる。

と、中学校から授業開始のチャイムが鳴る。彼女たちは慌てる。ミハルはスマホをリーダーらしき中学生に渡す。みんな、慌てて制服に着替える。

三分とはかからない。ミハルもそうする。中学生には負けてはいない。

華美は慌てて、もと来た道を走り降りる。ミハルも同じ道を通って学校に帰るはずだ。見つかったらたいへん。走り降りると息が詰まる、でも我慢する。校門にたどり着いて、時計を見る。小学校の昼からの授業に七分遅れている。ミハルが十分遅れるのはこのためだ。運動場には赤帽と白帽の生徒だけ。なお、一年生が給食を終わって、帰るためだろう、校門は開けられたままだ。ここから、自由に出入りができる。

華美は小山への入り口を見る。ミハルの姿はまだない。急いで校門から少し離れたブロック塀の角を曲がる。ここだともうミハルには見つからない。

自分がひどく興奮していることが分かる。「よいちょまる。よいちょまる」という言葉が口から出てくる。「よいちょまる、よいちょまる」と歩道を歩きながら呪文のように唱え、しばらくはどこへいくともなく、ただ歩くために歩いた。

と、突然後ろから、自転車に乗った女が華美の横をすり抜けた。ハンドルの先が腕に当った。自転車が揺れ、華美もよろけた。途端、身体がまるで裏返ったような気分になる。

すばやく身を立て直す。自転車の女はすでに一メートルも先を走っている。

「コラー。危ないやないか、歩道を自転車に乗るな」と叫ぶ。

女は長い髪をなびかせながら、振り向きもせず、何もなかったかのように走り去る。

「こらー。ブス、ゴミ、ばばあー」罵り言葉を礫のように彼女の背中へ投げつける。

こんな言葉！　もしミハルが使えば必ず怒るに違いない。日頃使ったことのない言葉が自然と出てくる。不思議だ。でも、悪い気がしない。楽しい、すっとする。この気分、朝に訪れたスーパーでも感じた。後ろで髪を結んだ女店員を無能呼ばわりしたときの感じと同じ。

だが、その刺激が、いったい自分は今どこに向かって歩こうとしているのか？　と気づかせた。家に向かっているのではない。それははっきりしている。ではどこへ？

どことは分からないが、行くべきところがあるような気がしてならない。そこはどこ？

老婆の行きたいところはスーパー、万引きのため。ミハルの行きたいところは、あの建物、ダンスのため。吉本の奥さんの行きたいところは愛の交流場所、刺激を感じるため。

自分は……。そのとき、昨日の昼過ぎ、吉本の奥さんと高級レストランの前で出会ったことを思い出した。お高いことで評判のレストラン。でも、自分の専門は料理、どのような工夫がされているのか知りたい。そう思って、いいえ違うわ、それは口実。とにかく、

一度入ってみたかった。それで入った。そして、一番高いコースを注文した。だが、そこを出るときには強いむなしさを感じた。こんなところへ入るのではなかった、お金も使いすぎた。確かにおいしかった。でも、お金に見合うほどではない。しまったという思いだけがした。とそのときだ、確かに吉本の奥さんに出会った。思い出した。嫌なひとに出会った、と思った。「あのひと、ランチは〇〇レストランでよ。ご主人、いったい何をやっているのかしらね」と近所にいるおばあさんたちに言いふらすに違いない。でも、どうして、今思い出せたの？　まさか今もあのレストランへ向かっているわけではないでしょうね。

橋のところまでやってきた。橋の欄干から下を見ると、川幅は十メートルほど。水はそう汚くはない。魚が泳いでいるのが見え、カモも数羽浮いている。幼いときに住んでいたところの川に似ている。子供たちは夏になると、その川で遊んだ。川の深さは子供の肩辺り。子供たちは、水のかけあいをしたり、泳いだりしながら、わあ、わあと笑い合った。流れはほとんどなかった。

華美は泳ぎの衣服を着て、その川に行ったが、どうしても川には入れなかった。水が怖くて仕方がない。だから、みんなの遊んでいるのをただ見ているだけ。すると水から上がってきた同級の保君が傍に来て「怖くないから入れよ、泳げなくても歩けるから。気持ちいいよ」と華美の腕をつかんだ。「いや、いや」と言って保君の腕を力一杯払いのけた。その勢いで保君が倒れて、海パンに砂が付いた。「よわむし」と言って川に身を投げた。しぶきが空にまで届くほどに上がった。それを見て、悲しくなって泣いた。

また、つい最近見た夢のことも思い出した。家で独りでいた。なんだか悲しくなって、外に出た。すると、どこからか水が来て、どんどん、それが増えていく。人々は逃げろ逃げろと叫んでいるのに足は動かない。助けてと叫んでいると、大きな木が流れてきてそれにつかまってしばらく流されていく。木が何かの障害物に当たり、流れるのを止める。木の上に這い上がり、陸に上がり、高いところを目指して走る。身体は水浸しで、衣服が身体にまといつく。人々はそれを眺めている。

あまり気分のよい記憶ではない。それを払いのけるようにして、再び歩き始めた。橋を渡りきり、真っ直ぐにどんどん歩いた。耳に微かに音が聞こえてきた。いつも聞こえるジージーという音ではない。気持ちのいい音だ。その音の方へ歩いて行く。数十メートル歩くごとにその音は高くなる。音がはっきりしてきた。サーサー、シューシュー。こんな音ではない。言葉では言い表せない。でも、その音は先ほど、小山に登っていくとき聞いた葉ずれの音に近い。

右側に朱色の柱でできているお寺の門があり、その右側から狭い脇道があった。ああ、ここは知っている、市役所に行く道だ。ただ、脇道は下り坂になっていて、そこを歩いたことはない。音はその脇道の下から登ってくる。雨音に近い音。音に引かれるようにして華美は脇道にそれた。十メートルほど歩くと白塀に囲まれて、たくさんの墓石が立っていた。墓石にも陽があたっているが、どの墓石も黒っぽく感じる。気のせいだと思う。墓場の向こうが崖になっているようで、寺の屋根だけが見える。瓦たちにも陽があたり、さざ波が光っているように見える。上の墓場は死の場所なら崖下は生の場所。自分は今、崖上。怖い、早く下に降りなけりゃ。

さらに細い道を下る。古くなって黒じみた柱の門と帽子の庇のように突き出している屋

根、さらにその上に小さな屋根がもう一つ突き出ていて二重になっている。看板には寺の名前と横には「滝のある寺」と書いてある。そういえば、町が出すパンフレットに、「滝のある寺」という見出しの記事が載っていて、こんな街の真ん中に滝があるなんて、と驚き、是非、一度行ってみたいものだと地図で調べたことがある。

寺に入り左裏に回る。崖の上部は陽が当たっているが、下部のところは寺の陰になっていて、岩肌が水に濡れて黒光になっている。崖の一部からかなりの量の水が、光の糸となって落ちていて、下にある平らな石の上で玉となって跳ね上がり、激しい音をたてている。白い糸ももつれ合い、歌い合っているような音をたてる。崖上の死の場所をくぐってきただけに、水は激しく生きかえる。

そこは滝に打たれる修行場。白い帷子を着て、手を合わせ、お経を唱えながら頭から水を被っている女性の姿が思い浮かぶ。

突然、自分も滝に打たれてみたくなる。自分にくっついているいろんなものを洗い流したくなる。でも、自分に耐えられるかしら。

幼い頃、川遊びで川に飛び込めなかったこと、保君に「よわむし」と罵られたことを思い出す。もうあの頃とは違うわ、何だって出来る。万引きもできたのよ。

ようし、と思い、華美は上着もジーパンもみんな脱いで、それらを足許に投げ捨て、ブラジャーとパンティーだけになる。秋ももう終わりの頃だから、寒さが裸をなぜる。ぶるっとする。寒気が身体を被う。滝を見つめる。冷たそう、身体を腕で抱えこみながら、滝に近づく。水の音が真正面から聞こえてくる。透明な、激しい水音、ええい、と思い切って平らな石台の上に立つ。前を向く。頭にも身体にも水が身体全体を被う。激しい冷たさが身体のいたるところを刺す。それを必死で耐える。

一瞬くらっとするがすぐに前が見える。目の前を水滴が激しく落ちていく。髪の毛が目を塞ぐ。身体全体が痛い。だが、痛みが肌の中の垢を洗い流してくれるのだ。思わず手を合わす。「般若はらみた、般若はらみた」お経の言葉で唯一知っている言葉が出てくる。自分の肌の至る所に水の刃が当たる。そこから身体に水がどんどん入ってくる。冷たいというよりも感覚がなくなっていく。「般若はらみた」と必死で繰り返す。すると、自分の身体が自分のではなくなっていく。身体だけでない精神さえもなくなっていく。

乳房と臀部と性器には水が直接当たっていないことに気づく。それらにも直接水を当ててやりたくなる。美しい水を染み込ませてやりたい。ええい、脱いでやれ、ブラジャーとパンティーをとろう。

ブラジャーは簡単にとれたが、パンティーは、片足を上げなければとれないので、いったん滝の外に出た。すると、不思議、水の中よりも寒さを感じた。慌ててそれらを投げ捨て、再び滝の中へ入った。誰かが自分を見るかもしれない。でもそんなことはどうでもいい。平気。こんなに肌がみずみずしくなっていくのだもの。臀部にも激しく水が当たる。きっと水滴が跳ね返っているに違いない。乳首にも直接水が当たる。ミハルがおっぱいを飲むとき、時々、乳首を歯のない歯で力強く噛んだことを思い出す。柔らかで強い感触。恥骨にも勢いよく水が跳ねる。跳ねた水が再び恥毛を伝って、性器を撫でていく。だんだん頭がぼうとしてくる。でもそれが気持ちがいい。このような気分を味わったことはない。気を失うのかなと思うがそうでもなさそう。身体全体が氷になっていく。周りが暗くなる。でも跳ね落ちる水群は見える。音も聞こえる。それに身体の芯だけは熱い塊となっていく。

不意に誰かの声がする。「私にも滝に打たせて」。その声が近づいてくる。滝の修行に誰か来るのか、声がだんだん大きくなってくる。いけない。これは、自分一人が独占するものではない。来たのはきっと自分と同じ専業主婦に違いない。

華美は、狭い坂道を上に向かって歩いていくが、少し強い風が頬を撫で、寒気が襲った。突然立ち止まり、髪の毛を片手で撫で下ろすと、水滴が額を伝って瞼までやってくる。慌てて目を閉じ、手で拭う。

ふと、癖になっている耳に意識がいく。あれっ、と思う。ジージーという音が聞こえない。どんなときでも鳴りつづけていたあの耳鳴りが聞こえない。なぜ？

それにどうしたの？　こんなに髪の毛が濡れ、それに濡れたブラジャーとパンティーを片手で握り締めているなんて？　ジムのプールにでも泳いだの？　でもこの近くにジムはないし、ジムは会員でないと泳げない。

必死になって思い出そうとするが何も思い出せない。最近、よくあることだ。

ええい、一度今朝からのことを思い出してみよう、朝の様子ははっきりと思い出せる。隣の奥さんと車でスーパーに行こうとして、奥さんを途中で下ろしたことも、スーパーで買い物をしたことも、でもその途中からはっきりしない。こんなものを買ったのかなあと、不思議に思う物もあった。老婆に出会ったことは思い出す。彼女の万引きを助けたことも。学校に呼び出されて、ミハルを探して見つけたこともはっきりしている。でも、その後のことはわからない。今のこの様子まで。その間に何があったのだろうか？

でも、まあいいか。思い出せないのならそれでもいい。何も生活には影響がないし、むしろ、身体がすっきりとしている。気分が爽快になっている。きっといいことがあったのに違いない。それに、いつか必ず思い出すだろう。

あっ、そうだ。忘れていた。まだミハルを探した結果を細井先生に報告していなかった。慌てて片手で携帯を捜す。

「必死で探しましたが見つかりませんでした。でも、いいです。もう探さなくても結構です。ご迷惑でしょうが、どうか十分遅れを許してやってください。きっと本を読んでいるのだと思います。それに、クラスのみんなにも十分遅れるのは、のっぴきならない理由があるからで、ミハルちゃんを許してあげてね、理由も尋ねないでやってね、と言ってくれませんか。お願いです。責任はすべて私が負います。いかなることが起こっても先生にはご迷惑をおかけしません。ですから、今のままにしてやってください。それが保護者からのたってのお願いです。それに、ミハルには先生が私に電話をしたり、私が探し回ったりしたことも言わずにおいてください。ぜひ、ぜひ、そのようにしてやってください。お願いします」そう言おうと思う。

華美は、濡れたブラジャーとパンティーを道端に置き、携帯を持ち、学校の電話番号を押した。

了